



Title	<資料>王様と私
Author(s)	中島, 憲一郎
Citation	長崎大学留学生センター紀要. vol.6, p.104-104; 1998
Issue Date	1998-06-30
URL	http://hdl.handle.net/10069/5552
Right	

This document is downloaded at: 2020-10-27T20:56:49Z

— 資料2 —

王 様 と 私

ユルプリンナー主演の映画に確かこのようなタイトルのものがあつたと記憶している。頭をツルツルに剃り上げた精悍な王様であつたと思う。しかし、私の王様は、体が大きいことを除けば、映画の王様とはあまり似ていない。彼は、2年前、ヨルダンから日本にやってきた。文部省の国費留学生に応募して、かなりの難関を切り抜け、見事に採用された秀才君である。九州大学での半年間の日本語研修を終え、長崎大学の私どもの研究室に所属することになった。名前はアルデハシ・ユニス・オサマという。日本語の飲み込みが早く、語学研修センターの発表会でNo.1に輝いたそうである。

ファーストネームがオサマであることから、誰ともなく“王様”と呼ぶようになった。ある日、本人にそのことを尋ねてみたら、王様がキングのことであり、発音が自分のファーストネームと同じであることをちゃんと知っていた。「でも、私は王様みたいにお金持ちではなく、力もありません」と流暢な日本語で言いながら笑っていた。

大方の留学生がそうであるように、彼も1年が過ぎたところでホームシックにかかった。妹さんの家族が長崎にいると聞いていたので、まさかとは思ったが、大きな体で寂しそうにしている姿は、こちらとしてもとてもやるせない思いであつた。昨年夏休みに、一時帰国したいと言い出した時は、正直言ってこのまま帰って来ないのでは、などと考えたりしたものである。ところが、やはり持つべきものは家族であろうか、夏休みが終わって再び私の元に現れた時は、初めて会った時のように、とても元気で希望にあふれた若者に戻っていた。

オサマに限らず、薬学部で学ぶ留学生はとても真面目である。二、三の例外もあるけれど、殆どの留学生が学習・研究にひた向きになって取り組んでいる。私たちが手を差し延べれば延べるほど彼等も答えてくれる様に思う。私自身の米国留学でも経験したが、親身にされる程それに応えたいと感じるものである。いつの時代でも同じであろう。広大なアジアの西の果てのヨルダンから東の果ての日本まで、すごい文化や慣習の違いを乗り越えて、何を求めてオサマはやって来たのだろうか。私はそれに応えているのだろうか。いつもそのことが気掛かりになる。

この一年半、オサマはとてもアクティブに研究し、面白い成果をあげている。研究室の学生達とも親しくなり、日本人より日本的になったような気がする。慣習上、お酒や豚肉を食することはできないが、他のも



(左側がオサマ氏)

のは何でも食べ、器用に箸を使いこなす。留学していて大事なことの一つは、その国の人と親しくなり、文化や慣習を共用することだと思う。異国にいると、どうしても同じ国の留学生同士が集まり易くなるものである。ヨルダンからの留学生が少ないこともあり、オサマは社交性が旺盛である。他学部の学生や他国の留学生ともすぐに親しくなる。日本語、アラビア語、英語を巧みに操りながら親交を深めていく。羨ましい限りである。

オサマが英語に堪能であることが、私にとって、大変有り難いのは、外国の研究者が訪ねて見えた時である。これまで、何度となくオサマの世話になった。今年になって、英国からC. K. リム博士が講演に見えた時も、雲仙に案内したが、やはり一緒に案内してもらった。写真はその時のものである。

すべての留学生が日本語や英語を流暢に話すとは限らない。特に、短期間滞在する留学生にとって、日本語の難しさは、計り知れないものがある。どうすればもっと日本のことを理解してもらえるか、どうすれば留学生生活をよりエンジョイしてもらえるか、留学生センターを中心に、思考し、実践していく時期だと痛感している。

(薬学部 衛生化学教室 教授 中島憲一郎)